日本歯科医史学会会誌・第15巻
第1号通巻54号・昭和63年10月

八束脛洞窟遺跡出土のヒトの歯（その 2)*

再び問う　縄文人の歯ではないか？

杉　本　茂　春**

I. はじめに

八束脛洞窟遺跡から出土した特異な古代人の歯について，飯島義雄・宮崎重雄・外山和夫氏は『日本先史時代におけるヒトの骨および歯の穿孔について，—八束脛洞窟遺跡出土資料を中心に—』(1985)『八束脛洞窟遺跡出土人骨における抜歯の系譜』(1986) を発表されたが，それらの歯を群馬県立歴史博物館ならびに月夜野町立郷土歴史資料館を訪れて特別観覧を許された私は，歯学の立場から熟視して，考古学的には弥生期と推定されても，なお，先住の民，縄文人の歯であろうと推察して，さきに『古代人の歯に聴く，—縄文か弥生か，重なりあう時代の呼び声，八束脛洞窟遺跡出土の三本の歯について』(臨牀歯科 No. 319, 1987) を発表した．

今回八束脛洞窟遺跡出土の歯が縄文時代から綿々と続いた先住民族の歯であったことを示す傍証として，『常陸国風土記』を引用する．大方，諸氏のご批判を仰ぎたい．

II. 風土記の漢字学的解釈

八束脛洞窟遺跡は群馬県月夜野町大字後閑字穴切にある．

群馬や月夜野の月夜について，また後閑については，さきに記・紀を引用し，史記，匈奴列伝を引いて概説した．

八束脛(やつはぎ)は，今日なまって“やつはぎ”と呼ぶが「八束ノ脛」(やつかのはぎ)(やつかはぎ) と呼ばれたにちがいない．

1束，ひとつかの8倍，“八束(やつか)のむこうずね”である．弥生人より目立って長いすねの持ち主たちと言うことで，長髄（ながすね）野郎とでも卑しめて，あだなしたのであろう．

『常陸国風土記』をひもといてみると，

……古老曰，昔在ニ国巣(クムス)ー俗語曰　都知久母(ツチクモ)又曰夜都賀波岐(ヤツカハギ)　山之佐伯野之佐伯　普置ニ掘土窟ー常居レ穴　有レ人来　則入レ窟　而竄之其人去　更出郊以遊之　狼性梟情　鼠窺掠盗無レ被ニ招慰ー　弥阻ニ風俗ー也　此時大臣族黒坂命　伺ニ侯出遊之時ー　以ニ茨蕀ー塞ニ施穴内ー　即縦ニ騎兵ー　急令ニ逐迫ー　佐伯等如レ常　欲ニ走而帰ニ土窟ー　尽繫ニ茨蕀ー衝害刺傷　終疾死散……

（古き“老いたる”おきないえらく，昔国巣(クズ)くにひとのことばに都知久母(ツチクモ)　又夜都賀波岐(ヤツカハギ)と云う．山の佐伯，野の佐伯あまねく土の窟を掘っておいて，常に穴中に住んでいる．人がやってくるとただちに窟に入りて隠れる．人たちが立去るとまた出てきて遊ぶ．無慈悲で凶悪な性質　わる強くて強情　人の目をぬすんでは他人のものを掠めとったりしてこそどろをはたらく．

饗応して心を楽しませ和ませようとしても，決して応じてこようとはしない．そのようなことで　いよいよ新しい風俗文化からへだたっていく．この時大臣の一族，黒坂命は夜都賀波岐(ヤツカハギ)

---

* Human teeth unearthed at relics of Yatsuhagi cave (No. 2)
Human teeth of Johmon period?

** Shigeharu SUGIMOTO: Osaka

らが油断して洞窟から出てきているところをみはからって，窟の入口をいばらでふさいでおいて，急に騎馬の兵を出して襲撃させた，彼らはいつものように慌てふためいて窟に逃げ入らうとしたが，穴は尽くいばらでおおいかくされていたから，いばらのとげに刺されひっかかれて，ついに死に絶えたということである）

と記録されている．

III. 考　察

風土記にみえる漢字を，説文解字を引いて漢字学的にみると，次の通りである．

国巣

国　邦也　くにする　土地　故郷の意

巣　鳥在木上曰巣　在穴曰窠　けものなどのすみかの意

参考，栗田　寛氏注；国巣ハ其国ニ住着キタル由ニテ云フ語ナルベシ吉野ノ国樔モ同ジ

と．

都知久母

都　有先君之旧宗廟日都　諸侯の居城のある地の意

知　詞也　ことばをつらねて神に告げる意

久　以後灸之象人両脛後有距也　人の両脛の後にけづめ（雄鶏の足の後方の突起）のような著しいふくらみ（隆々たる筋肉か？）

母　牧也从女象褱子一曰象乳子也　物を生じるもととなるもの，雌．

参考，栗田　寛氏注；都知久母ハ書紀マタ風土記等ニ土蜘蛛トアルモノニテ其土地ニ公トシテ勢アリシ由ノ名ナメレド之ヲ鄙メテ土蜘蛛トハ云ヘルナルベシ

と．

夜都賀波岐

夜　舍也天下休舍也　月が明るく活躍する時，すなわちよるをあらわす

都　〔前出〕

賀　以礼相奉慶也　ものを贈ってよろこびをあらわす

波　水涌流也　ゆれるなみ，ざわざわとゆれうごく意　水わきながれる

岐　古文郊从枝从山　わかれみち　高い，わかれる

頭注；按越後風土記曰　越国有レ人　名ニ八掬脛ー　其脛長八掬　多力太強云云　与下景行紀所レ載以ニ七掬脛ー為中膳夫上名相似焉

八束脛

八　別也象分別相背之形　数字の八

束　縛也　木をつなでしばったさまによって“たば”“たばねる”四本の指をにぎった長さ

脛　胻也　脛耑也　むこうずね　ひざから下，くるぶしの上の部分

IV. ま と め

以上を要約すると，

1　国巣とは，獣のすみかと同じような洞窟をうがって，この地方に住むものども，穴居する人びと．

1　都知久母とは，自分たちの住む洞窟のまえにたむろして，神にねがいごとをとなえながら共同生活をしている人びと．

1　夜都賀波岐とは，太陰の精，月があかるく，かがやかしくみえるとき（夜）夜な夜な山の中腹の高いところ，いくどもえだわかれして見失われそうになったところ，言わば道なき奥にあつまって神に祈っては喜びの声を出し，ざわざわと動きまわっている人たち．

1　八束脛とは，ひざから下，くるぶしの上の部分，むこうずねの長さが八束もあるすねながで，そのうえ大力，強靱な体力の輩（やから）八束の脛を特徴とする人びと．

1　長髓彦（ながすねひこ）たちの住む洞窟を“八束脛洞窟”と名付けた人は，いつの時代のだれだったのだろうか．

風土記成立は和銅年間，また，古事記の撰者太安万呂は実在の人であった．

V. む す び

八束脛洞窟出土のヒトの歯は，古い縄文文化にあこがれる先住土着の穴居人のものであったと考えたい．